

地域と歩む博物館

～平塚市博物館の活動から～

塚田 健(平塚市博物館)

平塚市博物館は1976年に開館した「相模川流域の自然と文化」をテーマとした博物館です。プラネタリウムも併設されており、天文分野の活動も行っています。

当館は地域博物館の先駆けとして、開館以来“放課後博物館”というコンセプトを掲げて博物館活動のすべてに市民が関わることを核として歩んできました。天文以外の活動も含め、これまでの取り組みを紹介するとともに、抱えている問題点や見えてきた課題を提示します。

1. 平塚市博物館の概要

平塚市は神奈川県湘南海岸中央部に位置する人口約26万人の都市です。その市街地中心部にほど近いところに位置する平塚市博物館(以下、当館)は市域を流れる相模川流域と南沿岸に広がる相模湾を活動の場とする生涯学習施設です。“相模川流域の自然と文化”を活動テーマに掲げ、自然分野(地質・生物・天文)と人文分野(考古・歴史・民俗)の6分野を扱う総合博物館です。学芸員は各分野に1名(天文分野のみ2名)、計7名が在籍しています。また博物館活動のすべてに市民が関わる「地域博物館」として設立され、開館準備段階から市民との連携・協働を前提とした博物館活動を行ってきました。

博物館の活動には、資料の調査・収集、寄贈資料の受け入れといった“インプット”、資料の整理・分析、研究、処置といった“評価”、資料を活用した展示(公開)・学習活動、資料の保管といった“アウトプット”と大きく3つの柱がありますが、当館ではそれらすべてに市民が参加しています。そもそも当館は、「平塚市に貴重な国宝や重要文化財がある」「歴史上著名な人のゆかりの品がある」ために博物館建設が決まったわけではありません。地域の自然・歴史を後世へ残し、かつ伝えるべきと市民と行政が判断したためです。地域のモノの価値はその地域に住む人々が決めることであり、学芸員は学術的サポートをするに過ぎません。ここに、地域博物館である当館の活動すべてに市民が関わる理由があります。

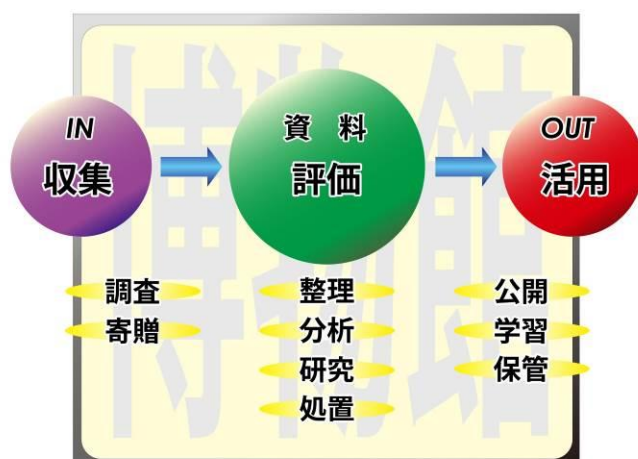


図1 博物館の活動

博物館の活動には“インプット”(資料の収集)、“評価”(整理・研究)、“アウトプット”(公開・保存)がある。平塚市博物館ではそのすべてに市民が関わる。

2. 全体の活動の実際

ここで、天文分野に限らず、当館全体として市民とともに行った活動例を紹介します。

2.1. 活動のはじまり ～みんなで調べよう

開館当初、資料収集と調査研究を兼ねた活動「みんなで調べよう」が行われました。これは、市民一人一人に身近な自然について調査をしてもらい、それを集約して全市的な自然状況の調査を行おうというものです。学芸員が市域全域を調査するには限界がありますが、市民一人一人に自分が住んでいる地域一か所でも調べてもらえれば、全体として大きな結果となります。博物館の役割は学芸員が調査の方法や注意点を説明すること、結果を集約してまとめ考察することです。

最初に行われたのは「タンポポ」の調査です(1978年)。タンポポは一見するとどれも同じように見えますが、在来種であるカントウタンポポや外来種であるセイヨウタンポポ、アカミタンポポなど、いくつかの種類があります。そのタンポポの分布状況と周囲の自然環境(土地利用の様子など)に関係があるのか、という観点で調査が行われました。その結果が図2の通りです。結果、市街地には外来種であるセイヨウタンポポやアカミタンポポが、山間地には在来種であるカントウタンポポがそれぞれ分布していることが分かりました。市街地内でも、河川敷や公園の中などにはカントウタンポポが分布していることも分かり、また同じ市街地でもセイヨウタンポポとアカミタンポポの分布はかなりはっきりと分かれていることも明らかになりました。

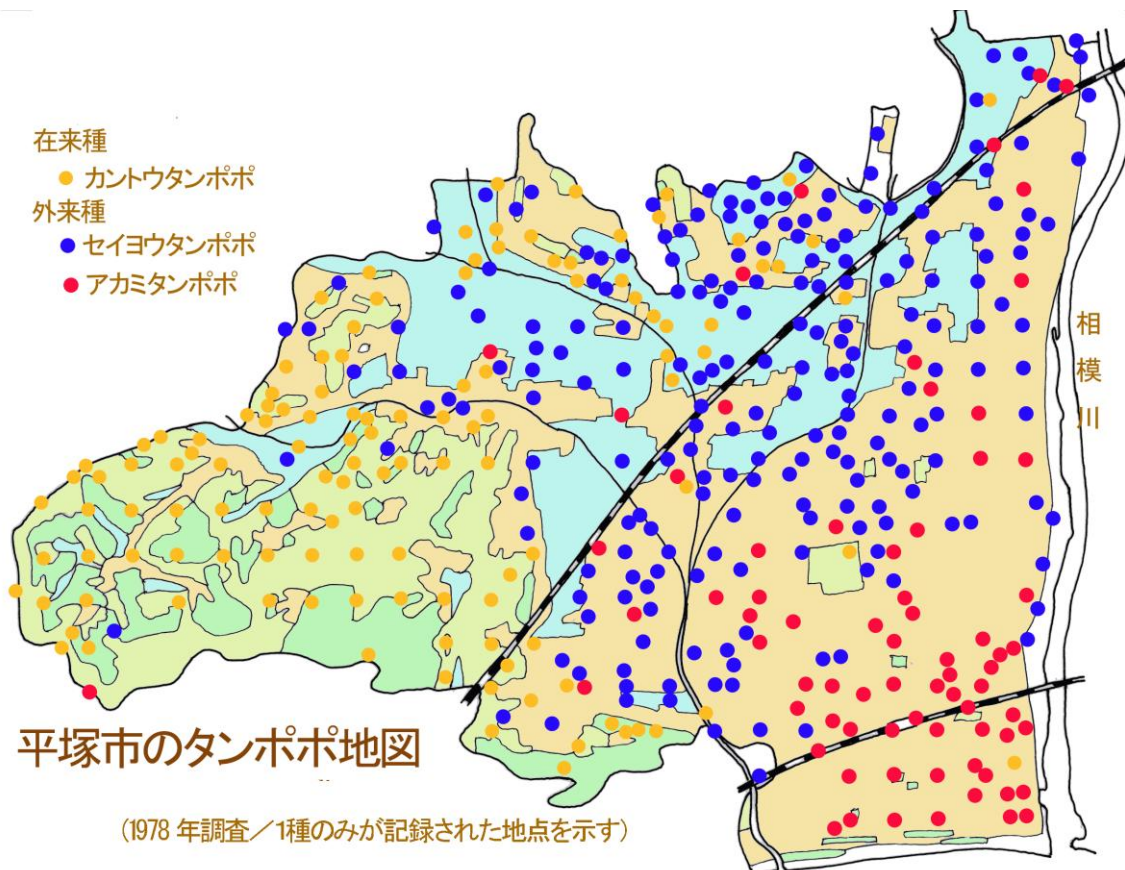


図2 平塚市のタンポポ地図

平塚地域の西に広がる山間地にはカントウタンポポが、地域の東側を占める市街地にはセイヨウタンポポとアカミタンポポが分布している。市街地でも南側はアカミタンポポが、北側はセイヨウタンポポが主に分布していた。

タンポポ調査の次に行われたのはセミの調査でした。セミは鳴き声からその種類ごとの分布を探るとともに、抜け殻も収集しました。これにより、数多くのセミの抜け殻が集まり、博物館の収蔵資料が充実するとともに、標本目録が刊行され環境庁(当時)の全国調査にも役立てられました。

このように、「みんなで調べよう」という活動は単なる教育普及事業や調査研究事業にとどまらず、さまざまな活動へと発展していきました。セミの抜け殻調査を例に見ていきましょう。まずは一過性の行事として「ぬけがらを探そう」や「セミの羽化を見よう」などが行われました。そこから参加者の興味関心が高まり、市域のセミの分布を調べてみたいと「みんなで調べよう ぬけがら調べ」がスタートしました。その分布調査結果は「平塚のセミの分布」というレポートとしてまとめられ、集められセミの抜け殻とともに常設展示「街の中の動物」に展示されました。抜け殻の標本はその後蓄積され、分類・整理なども市民が行い、標本目録を刊行、環境庁(当時)や湘南地域の共同調査へと活かされました。

この「みんなで調べよう」という取り組みは、資料の収集・整理、調査・研究、展示・発表など博物館活動のあらゆる場面へと発展し、それぞれに市民が活躍するものとなりました。その後、しばらくは行われていませんが、来年度以降、「夜空の明るさ」をテーマとして天文分野の「みんなで調べよう」を実施することを検討しています。

2.2. 現在の市民参加

現在の博物館における市民参加として、サークル活動が挙げられます。博物館が扱う自然人文6分野それぞれに1つ以上のサークルがあり活動しています。サークル活動は博物館主体でそれぞれ学芸員が担当していますが、その活動形態は様々です。主なものをいくつか紹介します。

・裏打ちの会

裏打ちとは、古文書などの裏に和紙をあて、補強修復する作業のことを言います。館蔵の古文書資料を長く後世に伝えるためには適切な保存が不可欠ですが、そのための一行程ということになります。その作業を学芸員とともにやっているのが「裏打ちの会」です。熟練を要するため、サークルとしての新規会員募集はごく少数にとどめ、古参の会員が指導を行っています。



図3 裏打ちの会の作業の様子

霧吹きや糊を用いて、古文書の裏打ちをしていく。

・地質調査会

地質分野にはほかに「相模川の生い立ちを探る会」というのがあり、こちらは相模川流域や相模湾岸に出かけ、地質調査・資料収集などを行っています。その会のさらに有志が集まり、資料の採寸などの調査、分類整理を行っているのが地質調査会です。膨大な量の地質資料の整理は会員の尽力で進められています。



図4 地質調査会の作業の様子
岩石資料の採寸、分類整理をしている。

・古代生活実験室

古代生活実験室では、火起こしや鹿角での釣り針づくりなど、主に研究的活動を行っていますが、その成果を活かして教育普及事業での子どもたちの指導や、学校での土器製作授業において学芸員の補助を行っています。



図5 子どもに火起こしを指導する古代生活実験室会員
ゴールデンウィーク恒例のイベント「はくぶつかん子どもフェスタ」では大活躍。マイギリを使った火起こしの方法を子どもたちに指導している。

以上は、当館におけるサークル活動のほんの一例で、ほかにも多くの市民が主にサークルという形で博物館活動に関わっています。

3. 天文分野における市民との博物館活動

天文分野も主にサークル会員が主体となって市民が博物館活動の様々な場面に関わっています。天文分野には「天体観察会」と「星まつりを調べる会」の2サークルがあり、そのうち筆者が担当している天体観察会について紹介します。

・天体観察会

当館には自由参加で天体観察ができる「星を見る会」というイベントが月に1回ほど開催されていますが、天体観察会はそれでは物足りず、自分で望遠鏡を操作して天体観察をしたり天体写真を撮影したりしたい人たちが集まっているサークルです。学芸員の指導の下そのやり方を覚えていきますが、熟練した会員には前述した「星を見る会」での望遠鏡の操作・天体の解説などを担当してもらっています。また、天体写真の撮影には自信がある会員も多く、彼らが撮影した天体写真は当館の貴重な資料として提供していただいています。天文の調査活動を市民とともに行うときには、天体観察会会員にまず説明し、市民視点での助言をいただくこともしています。天文分野の特別展を開催するときは、勉強会を行ったうえ展示制作作業も学芸員とともにいきます。



図6 天体観察会会員が平塚市内で撮影した2012年5月21日の金環日食

この日、市域は雲に覆われ、場所によって見えたり見えなかったりした。当館屋上は雨が降っていたが、市北部では見事な金環日食を撮影できた。市内で撮影された金環日食として貴重な1枚となった。



図7 学芸員とともに展示制作を行う天体観察会会員

右は大きな模造紙に天体の位置をプロットする会員の様子。左は筆者とともに模型に光ファイバーを取り付ける会員の様子。

4. まとめ

博物館活動に市民を巻き込む、と聞くと、ともするとボランティアを募ってその人たちに経費的に節約でき、学芸員の負担も軽くできると考える人たちがいます。しかし、それは大きな間違いです。博物館活動に市民が加わるということは、ただお手伝いをするのではなく、博物館の機能や意味を理解し、学芸員とともにその業務の一端を担うことになります。それは学芸員にとっては、市民の指導などに時間を割かれるわけであり、むしろ負担は増える方向に働きます。

では、その負担を背負ってまで博物館活動に市民を加える理由はなんでしょうか？ それは、博物館が扱うフィールドである地域は、そこに住む市民がつくるものだからです。街は、ただ人が住めば街になるわけではありません。連綿と受け継がれてきた文化、周囲の自然環境があってこそ街になります。その街を伝えていくのはそこに住んでいる人々にほかなりません。最初にも書いたように、地域の資料の価値を決めるのは地域に住む人々です。そして、博物館はその地域の資料を集め、活用し、残していく場です。で、あれば地域博物館において市民が資料を扱う博物館活動に関わるのは自明のことでもあるはずです。地域博物館の学芸員は、通常の学芸業務に加えて、そのことにもより注力しなければいけないと私は考えます。

とはいえ、当館もすべてがうまく回っているわけではありません。当館ならではの特殊事例もあるでしょう。今回発表したことはあくまで一例であり、ぜひ皆さんの身近な博物館がどのように市民と関わっているか、訪ねてみていただければと思います。また、それを踏まえたうえで当館の活動に興味がありましたら、ぜひとも見学に来ていただければと思います。